立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2024年度研究成果報告書

研究科名	コミュニティ福祉学研究科 社会福祉専攻	
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学研究科・教授	湯澤 直美
研究課題名	女性のエンパワメントの視角による母親支援	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名
	コミュニティ福祉学研究科 博士前期課程2年	小倉 明子
研究期間	2024年度	
研究経費	(支出金額) 84,670円 / (採択金額) 100,000円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

女性は母親になるとその役割を全うすることを周囲から求められ、生きづらさを抱える傾向がある。とりわけ不登校の子どものいる母親は、孤立して課題を抱え込む傾向があるにもかかわらず、母親自身に焦点を当てた支援は極端に少ない。

そこで本研究では、家庭や学校から求められる母親役割がいかなるもので、どのようなジェンダーをめぐる諸課題を母親たちが抱えているのを明らかにしたうえで、母親はいかにしてエンパワメントに向かうのかを不登校の子どものいる母親に焦点をあてて分析した。そのために、①文献研究、②不登校新聞に掲載されている母親たちの声の分析、③インタビュー調査およびM-GTAによる分析を実施した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[エンパワメント] [ジェンダーセンシティブティ] [不登校支援]

研究成果の概要 (600～800字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

文献研究では、「母性」という概念やフェミニストソーシャルワークなどを切り口に、母親が女性であることによってもたらされるジェンダーをめぐる課題について整理、考察したことに加え、不登校新聞の分析を行い、不登校とそれをめぐる母親の葛藤はもはや個人的な課題ではなく社会の普遍的な課題となりつつあり、母親にはエンパワメントの視角による支援が必要であることを明らかにした。それを踏まえて不登校の子どものいる母親にインタビュー調査を行い、M-GTAの分析方法を用いて母親たちがどのように葛藤を乗り越え、いかなるプロセスを辿ってエンパワメントに向かうのかを結果図とストーリーラインによって示している。

特に結果図では、交差性概念の視点を取り入れ、母親には「個人としての私」「家族の中の私」「社会で生きる私」という異なる次元に基づく立場があり、その狭間に言語化しにくい葛藤があることと、同時にそれはエネルギーの源泉でもあり、人生を豊かにしていく側面があることをも可視化している。

分析結果からは不登校の子どものいる母親にはジェンダーをめぐる生きづらさがあり、その解放にはジェンダーセンシティブリティを踏まえた支援が効果的であることが裏付けられた。特に支援者が自らのジェンダーや立場をめぐる特権性に敏感で、社会の仕組みに埋め込まれている不平等を真摯に聴き取ろうという支援によって、エンパワメントが促進されていたという調査結果を踏まえ、本研究では最終的に「女性のエンパワメントの視角による母親支援」の在り方を具体的に提示している。

ソーシャルワークが環境への働きかけを視野に入れることを鑑みれば、不登校の児童生徒をとりまく環境へのアセスメントや母親への支援にジェンダーセンシティブリティを取り入れることは、急増している不登校への対策としても一つの方向性を拓いていくと考えられる。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。

該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① 小倉明子、「スクールソーシャルワークへのジェンダーセンシティブティ導入の試み」、立教大学 コミュニティ福祉研究所紀要、第27号、2025年、pp17-35
- ④ 東京福祉専門学校「ソーシャルワークの基盤と専門職」における授業教材としての採用と講義
(令和7年1月21日 於 東京福祉専門学校)